

## 医療系専門職を目指す学生に対する 早期体験実習の方法と学習効果に関する文献レビュー

### The Literature Review of the Methods and the Effects of Early Exposure for Students Aiming to Become Medical Professionals

塚本藍子・岸 央子・古田雅俊

Aiko Tsukamoto, Yoko Kishi and Masatoshi Furuta

#### 要 約

本研究の目的は、医療系専門職を目指す学生に対し行われている早期体験実習の内容と学習効果について明らかにすることである。研究対象は、医学中央雑誌 Web および CiNii による文献検索にて抽出された18件の医療系専門職教育9分野における早期体験実習に関連した文献とした。結果、現地での見学実習、他学部合同実習、病院以外での実習、Web ツールの活用を組み合わせるなどの方法がみられた。学習効果として、対象者を捉える視点を広げ対象者の立場から生活者としての視点で患者理解を深めることができ、コミュニケーションの重要性を感じることができていた。また医療従事者としての態度を学ぶことができていた。以上のことから、幅広い施設に行くことで医療実践の場についての理解が深まること、生活者としての対象理解を深めるためには可能な限り臨床に出向き体験を意味づけしていくこと、多職種間の関わりを持てるよう整備していくことが必要であると示唆を得た。

**キーワード：**早期体験実習、医療系専門職を目指す学生、実習方法

#### I. はじめに

看護学における臨地実習は、学内での学習が終了した高学年次に限られるものではなく、条件が整えられるならば早期の学年次から組み込む必要がある（文部科学省，2002）とされており、看護学においては多くの教育機関で早期体験実習が導入されている。入学後1か月という早い段階に病院の機能やシステム、病棟の特徴、病床環境、入院患者の状況、看護援助、看護師の役割などを、見学を通して知ることによって医療の現場のイメージをつかみ、後に学んでいく専門領域の土台を作ることにつながる。早期体験学習の効果はそこだけに留まらず、学生は患者や看護師との関わりを通して、看護師への憧れを具体的な目標へと転換していること、看護学生としての自覚や心構え、学習意欲向上につながっていることなど多くの効果が報

告されている（岩脇・滝下・今西，2008；早川・古田・中村，2016；山口・上野・緒方，2007）。

看護学における早期体験実習では、学生は看護師と行動を共にする見学中心の実習内容を含むことが多い。臨地実習の場に卓越した看護職者のロールモデルがいることが学生に良い影響を与え、看護職者が学生にケアの実践モデル、専門職者としての役割モデルとして機能してこそ臨地実習の意味があり（文部科学省，2002），早期体験実習においても、学生が実際の看護師を目の当たりにすることで得られる役割モデルからの学習効果が高い。

臨地実習における体験は、看護基礎教育の中で重要な学習要素であり、「経験は、知覚による客観の認識と規定すると、体験は個々の主観に位置し、客観性に乏しく知性による加工、普遍化を経

ていない。まさに看護学における実習という授業展開は、体験を経験とする学習場面として極めて重要な役割を持つ」(杉森・舟島, 2021)とされている。臨地実習は、聞くだけではイメージのつかない現場の状況を自分の五感を使って体験することを通して、看護について考えることのできる貴重な場面であるといえる。入学後早期に五感を用いた体験をすることは、看護学を学習する上での土台となりうるといえる。

しかし2020年、COVID-19の感染拡大が起これ、多くの実習施設の場であった病院での臨地実習の中止を余儀なくされる事態が生じた。文部科学省(2020)が、実習施設での実習が困難な場合は学内実習などの実施により必要な知識及び技能を修得することができると示したことを受け、看護教育機関では本来の臨地実習の目的を達成することを目指しながらも、学内実習への変更を強いられることが多くなり、学生が臨地での体験を積むことができる回数が減少した。今日までに、学内実習でのオンラインツールの活用、事例展開による学内での知識の積み上げなど、様々な工夫がされたことが報告されている(菅原・岡根・西川他, 2021; 小向・高橋・井上, 2022; 宮武・井上・小林他, 2020; 田中・伊藤・日沼, 2020; 村井・石川・久保木, 2021)。高い学習効果が得られるよう臨地実習の代替方法がとられてきたが、臨地での体験の有無による学習効果の違いが生じていることは否めない。これらのことから、コロナ禍において臨地実習の在り方が改めて問われている現状があり、臨地実習の方法や効果の根本を見直す必要が生じているといえる。

看護学に限らず、医師、薬剤師、理学療法士、作業療法士等様々な分野の医療系専門職を目指す学生に対する教育においても多くで臨地実習が行われている。中でも実習目的が看護学と類似しているのは、入学後早期に実施されている早期体験実習である。早期体験実習により医療職を目指す学生としての自覚や心構え、学習意欲の向上につながっていることが多い。医療系専門職を目指す学生に対して実施されている早期体験実習に広く目

を向けることで、固定観念にとらわれない臨地実習の在り方についての示唆を得ることにつながるのではないかと考えた。医療系専門職を目指す学生における早期体験実習の方法や効果に関する報告は散見されており、医学中央雑誌 Web で「早期体験」をキーワードとして全年検索したところ123件が該当した。しかしこれらの研究成果を概観できる文献レビューはみられない。そこで、対象を看護学のみでなく医療系専門職を目指す学生に拡大し、各分野で実施されている早期体験実習の方法と効果について確認することで、看護学での活用における示唆を得る必要があると考えた。

## II. 研究目的

本研究の目的は、国内の文献検討により、医療系専門職を目指す学生に対する早期体験実習がどのような方法で行われ、どのような学習効果を得ているのかを明らかにすることである。

## III. 研究方法

### 1. 用語の定義

「早期体験実習」：本研究では早期体験実習を、4年制大学または短期大学・専門学校の1年次に開講している講義以外の体験が含まれる実習で、実習目的に、医療職を目指す学生としての自覚や心構えを得ること、学習意欲の向上につなげることが含まれているものと定義する。

### 2. 分析対象文献の抽出

検索データベースは、医学中央誌 Web と CiNii を用いた。医療系専門職を目指す学生に対する早期体験実習は、「早期体験学習」「見学実習」「体験学習」など表記が様々であるため、検索ワードを「早期体験」とし、会議録を除いた原著論文に限定した。また、近年の学生の特徴や社会情勢、医療職者に求められる専門性の変化をふまえた実習内容についての見解を得られるよう、検索年度を限定した。2016年に、看護学における早期体験実習の学修効果について述べた論文が発表されており(早川他, 2016)、本研究成果を今後の早

期体験実習方法の検討につなげるため、検索年度は2016年以降とした。

さらに、以上の条件で抽出した文献の内容を確認し、本研究の目的に沿ったものおよび本研究における「早期体験実習」の定義に沿って該当文献にて述べられている実習内容を確認し、研究目的に合致するものに限定した。

### 3. 分析方法

各対象文献で述べられている早期体験実習の方法と学習効果に着目し、検討した。

### 4. 著者の論文作成に対する貢献

A. T は研究の着想、データ収集および分析、論文作成のプロセス全体に貢献した。Y. K は研究目的・根拠の整理、データ収集および分析、論文の作成に貢献した。M. F は研究の着想、論文の作成に貢献した。すべての著者は最終原稿を読み、承認した。

## IV. 倫理的配慮

文献からの引用は述べられている意味内容を損なわないようにし、出典を必ず明記する。

## V. 結果

医学中央雑誌 Web でキーワードを「早期体験」として、原著論文に限定し会議録を除いた2016年～2022年の設定で検索した結果、42件が該当した。また、幅広く医療系専門職を目指す学生に関する研究論文を抽出できるよう、CiNii での検索も行った。CiNii では、「論文」に限定し、期間を2016～2022年に絞り込んで検索したところ47件該当した（最終検索日：2022年12月18日）。医学中央雑誌 Web と CiNii で該当した文献の重複を除外したところ58件が抽出された。抽出された58件の文献の内容を精読し、早期体験実習の方法と効果が具体的に読み取れる記載があること、本研究における「早期体験実習」の定義に沿った実習についての記述があることを確認し、抽出された18件を分析対象とした。対象文献で述べられて

いる早期体験実習の方法と学習効果を整理し以下に述べる。

### 1. 早期体験実習が行われていた医療系専門職の資格取得を目指す職種

対象文献で述べられていた教育機関の学生が資格取得を目指す職種は、看護師6件、医師4件、歯科医師2件、薬剤師6件、理学療法士3件、作業療法士3件、助産師1件、栄養士1件、臨床検査技師1件、診療放射線技師1件、歯科衛生士1件、社会福祉士1件であった。

### 2. 早期体験実習の方法

#### （1）実習場所

実習場所は、高齢者施設、病院、障害者支援施設、通所リハビリセンター、介護センター、助産所、近隣のマタニティクリニック、幼稚園、診療所、老人介護施設、市町村保健センター、訪問看護ステーション、保健所、老健施設、老人ホーム、グループホーム、デイサービスセンター、歯科医院が選択されていた。

#### （2）実習前の学内での取り組み

実習前には、医療倫理のDVD視聴や心肺蘇生演習、手話講習、薬害講演会、高度医療専門職の役割や学校の求める人物像、人材像について講義、車いすの介助方法に関する講義と演習、障害学生の支援体制に対する講義、多職種から仕事内容や指示出しの留意点などを含む講義など、実習内容を踏まえた講義が実施されていた（二宮・若村・黒木他, 2018; 西本・久永・桂他, 2019; 渡部・伊藤・八木他, 2018）。また学習内容を深めるためのグループワークも実施していた（石橋・芝崎・杉山他, 2021; 二瓶・浜上・木村他, 2021; 西村・森・安田他, 2022; 斎藤・橘・島田他, 2019; 山口・吉田・山本, 2019; 山西・矢野・中岡他, 2020）。実習前プレテストを実施している学校もみられた（田中・幸田・松村他, 2018）。

#### （3）患者体験実習

検討対象の論文で述べられていた実習では、患者体験を取り入れているものが4件あった。患者

体験の内容は、ハンディキャップ体験（渡部他，2018），車いす体験（伊藤・辻村・真柄他，2019；二宮他，2018），外来患者付き添い体験（二宮他，2018）であった。

#### （４）学部混合での取り組み

医療系の異なる資格取得を目指す学部が存在する大学では，多職種との連携教育にも力を入れており，実習前後のオリエンテーションや実習後のグループワークを混合で実施していた（木内，2019）。病院体験実習自体を多職種混合で行っている学校もみられた（二宮他，2018）。

#### （５）病院実習

病院実習の内容は，病院を支える各部門の見学実習，病院環境の探索実習・定点観測実習，希望職種の仕事の実際の見学，対象者とのコミュニケーションなどが行われていた（二宮他，2018）。また，解剖見学やドクターヘリの見学を行っている学校も見られた（西本他，2019）。

#### （６）バーチャル病院見学実習

COVID-19の感染拡大後に実習を実施した学校では，11部署をビデオ撮影し，zoomを用いて視聴する方法でバーチャル病院見学を実施していた。その際現場の職員も参加し質問に答えていた。2日目は学びについてのグループワークを実施。すべてzoomを用いて行っていた（石橋他，2021）。

#### （７）遠隔授業と対面授業の組み合わせ

二瓶他（2021）の報告では，早期体験実習は施設などには行かず，ワークショップとして学内でのみ行っていた。ワークショップは事前講義とグループワークから構成され，グループワークは，グーグルフォームでのノート提出，共同編集機能を使った意見交換を実施していた。

#### （８）実習後の学内での取り組み

実習後に学内で，小集団グループによるグループワークと発表を実施している実習の報告もあった（渡部他，2018）。この事例では，全体発表時にリフレクションシートを配布し，他グループの発表では疑問点を1つ以上書き出すことを義務づけており，実習内容の振り返りを意識的に実施していた。

実習前に体験実習に向けた事前学習に対するプレテストを実施していた学校では，実習後にもテストを行い，さらに1週間後にファイナルテストを実施していた（田中他，2018）。

#### （９）教員の関わり

外来受診体験実習を取り入れている学校では，体験終了後にただちに教員が関わり，その体験から患者の生活や生き様がみえるような意識づけを意図したリフレクションを実施していた（二宮他，2018）。

コロナ禍となり，現地に行かずにリモート病院見学を実施していた学校では，教員が動画内容をよく検討して，施設側と調整していた。また現地に行き見学を行った薬局見学においては，現場でしか得られない内容について，教員側から依頼していた（西村他，2022）。

グループワークを遠隔で行い，Googleドキュメントを使用する方法を取り入れている学校では，意見交換を教員がファシリテートしていた（二瓶他，2021）。

また，学生個々のレディネスを担当教員が把握することが必要と説き，健康な学生が，自らの生活体験と，目の前にいる対象者の健康の意味と結びつけて考察することには，教員による働きかけが重要であると述べている文献も見られた（小林・渡部・藤代，2016）。

### 3. 早期体験実習の効果

#### （１）学習態度

実習後に学生へのアンケート調査やレポートの分析をしていた文献では，早期体験実習の実施により，学生の学習意欲が向上したという結果が多く示されていた（斎藤他，2019；山根・毛利・中島他，2019）。

また，授業時間外の学習時間の拡大を確認できている文献もみられた（西本他，2019）。

#### （２）コロナ禍での取り組み方法による効果

リモートでの病院見学を実施していた学校では，要点を集約してビデオに収めることで一連の業務を知ることが可能となり，学修内容の増加，

学修機会の公平性の確保ができていた。実際の見学では限られた時間の中で業務の一部しか見学できないこともあるが、動画作成により意図的に見せたい場面を選択できるというメリットがあった。また事前にチャットで質問を募ると、例年より多くの質問が認められ、主体的な学修の促進が認められていた（石橋他，2021）。

Google ドキュメント共同編集機能やノート機能を使用することで、情報交換や意見交換といったディスカッションが例年よりできていた（二瓶他，2021）。

### （3）知識の定着

実習前後にプレテストおよびポストテスト、実習1週間後にファイナルテストを実施していた学校では、知識の定着の効果が出ていた（田中他，2018）。

### （4）患者理解

看護師に付き添い看護技術を見学した結果、患者・家族へ与える技術の影響や効果、技術の安全の確保・質・内容に着目することができ、患者の立場で、患者の表情や行動から生活者として技術に抱いているであろう感情や反応をとらえることができていた。一方で学習者として、ありのままの患者・家族を生活者や援助者ではなく第三者の視点で着目することもできていた（村越他，2020）。

また、実際の現場に立ち、その場の音やにおいを感じとった体験から、対象者の生活を多角的にとらえることができていた（山西他，2020）。さらに、対象者と話すことで、対象者に不安や悩み、個別性があることを知り、専門的な知識・技術の必要性を感じ、専門的なアドバイスの効果を確認することができていた（西出他，2019）。

外来受診体験実習では、体験終了後に教員が関わり、その体験に患者の生活や生き様がみえるような意識づけを意図したリフレクション（体験全体を振り返り言語化し、意味づけしながら振り返ること）を実施していた学校では、リフレクションをさせることで、患者の生き様、生活を見ることができていた（二宮他，2018）。

保健所実習では、「地域の特色の理解」や「時代背景の理解」が得られており、それ以外の施設では学びが得られにくいことがわかった（小林他，2016）。

車いすの体験実習を実施していた学校では、普段慣れている道や建物が車いす生活者にとって、不便であることの気づきに焦点があてられていた。周囲の人の眼差しも含めて、援助することの気づきにつながっていた。また、相手の立場に立って考えることの大切さを学んでいた（伊藤他，2019；二宮他，2018）。

地域の施設に分かれて見学実習を行ったことで、看護の対象者を捉える視点を広げることができていた（山西他，2020）。

### （5）コミュニケーション技術

実際の現場で医療従事者や対象者と関わることで、コミュニケーションの大切さ、難しさ、対象に合わせた関わり方の工夫を体験することで学べていた。同時に、コミュニケーション技術の活用不足、・困難さなど、今まで気づいていなかった自分の傾向に気づき、適応性についても考えることができていた（山口他，2018）。また、対人交流の重要性や積極的行動の大切さについても学び、自らも自立しようとする姿勢が見られていた（中根他，2020）。そして、対象者との関わりを通して、対象者への関心の向け方を学んでいた（小林他，2016）。また、医療従事者の対象者への関わりから、配慮や寄り添うこと、共に考える姿勢についてなど医療従事者としての態度についても考えることができていた（西出他，2019）。

実習後の学内グループ発表の際に、発表内容を振り返るリフレクションシートの活用を行っていた学校では、傾聴する態度を養う効果が見られた（渡部他，2018）。

発表の機会を持つことは、相手に理解してもらうことの大切さと、聞き手に伝えることの難しさを学ぶ機会ともなっていた（二宮他，2018）。

### （6）多職種連携の理解

多職種連携教育として他学部との合同で早期体験実習を取り入れている学校では、病院見学で感

じたスタッフの良好な関係性や、自身のグループがチームとして関係性を築いていく中で、自分の専門以外の職種に対する理解や重要性を学び、連絡や情報の管理または処理、チームメンバーとの協調などから、チームとしての態度を学んでいた。そこから、個人の態度や個人の能力、他者の理解などについても考えることができていた。特に、

専門的知識や技術を有さない時期の実習だからこそ、見て感じたことやグループワークで実感した個人の態度に関する気づきが多い。実際の活動で学生が不快と感じた事象からチームワークやチーム医療を阻害する要因を学習することができていた（滝沢・加納・吉良他, 2018）。

表. 早期体験実習の方法とその効果分析対象文献

研究者 (発行年)	論文題目	研究方法	指導する 職種 実習時期	実習方法			学習効果
				実習場所	実習期間	実施内容	
西村 森 安田 梅村 谷澤 中山 重山 (2022)	新型コロナウイルス禍での早期体験実習に関するアンケート調査結果の検討	2020年度と2021年度の早期体験実習を受講した学生へ自作の質問紙を用いて実習内容についての満足度・理解度をアンケート調査した。	薬学部 1年次生	薬局 学内	論文中に記載なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>＜リモートによる病院見学＞</li> <li>事前にSGD(Short Group Discussion)で病院薬剤師の役割について考察したのちに、リモート形式での7施設の病院見学をした。</li> <li>＜薬局見学＞</li> <li>事前にSGDにて薬局薬剤師の役割について考察し、見学を行った。7施設に分かれ、現場でしか得られない内容について説明内容を教員側から依頼して、実施した。薬局薬剤師業務についての講義も取り入れた。</li> <li>＜企業についての講義＞</li> <li>企業見学は中止し、外部講師の講義(2020年度はなし)を取り入れ、2021年度は岐阜県保健環境研究所、科学捜査研究所、ラクオリア創薬から対面形式による講義を実施した。</li> <li>＜救命救急講習＞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院見学は、リモートで実施し、学生の満足・理解度を高めることができた。</li> <li>・薬局見学では、学生の満足度・理解度・積極的な参加意欲度・学習へのモチベーションを上げ、将来像への役立ちができた。</li> <li>・SGDは、学生同士のSGDはリモートのほうが時間を気にせず実施できて効果的であったという意見もあり、両形式を取り入れたハイブリッド型の学習が効果的だとわかった。</li> </ul>
二瓶 浜上 木村 小田 (2021)	面接受講と遠隔受講を組み合わせた早期体験学習ワークショップの実施と検証	事前講義の提出ノートに対して定量的な検証をし、その一尺度や分量を検証した。到達目標に対する自己評価から対面と遠隔の受講形態の相違を検証した。	薬学部 1年次生 9月～12月	学内	6日間	<ul style="list-style-type: none"> <li>＜ビデオ教材による保険薬局業務見学＞</li> <li>保険薬局の画像、およびそこで勤務している講師による説明の動画によるワークショップを行った。</li> <li>＜グループワーク＞</li> <li>対面式の講義と遠隔授業を組み合わせ、受講形態を毎回入れ替えた。終了後20分程度でGoogleフォームでのノート提出を課し、共同編集機能を使って意見交換を実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタルでの学び合いの機会では、ノートの一尺度や分量は増加した。</li> <li>・デジタルを活用した工夫が与える新鮮さから遠隔受講の学生へ効果を発揮できていたが、ワークショップを重ねるにつれて、むしろ現実空間での学修の良さを学生が再認識していた。</li> <li>・レポート作成の結果では、Googleドキュメントの共同編集機能による情報交換や意見交換といったディスカッションができていた。</li> <li>・事前講義に関しては、遠隔受講による比率の低下が大きく見られた。</li> </ul>
石橋 杉山 荒木 大西 川村 金田 小山 友利 椎橋 森茂 (2021)	医学部1,2年生に対するバーチャル病院見学・医師業務見学の試み	早期体験実習中の学生の態度グループワークでの発言、振り返りアンケート調査からの考察をした実践報告した。	医学生 1年次5月	学内	2日間	<ul style="list-style-type: none"> <li>＜バーチャル病院見学＞</li> <li>教員が承諾を得られた11部署をビデオ撮影し、バーチャル病院見학을zoomを用いて実施。各部署の職員もできるだけzoom講義に参加してもらい、チャット機能を用いて集めた質問に答えてもらった。</li> <li>＜グループワーク＞</li> <li>2日目はすべての部署を見学終了後にZoomのブレイクアウトルーム機能を用いて「自己学習から始まったバーチャル病院見学で何を学んだか」をテーマにグループワークを実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バーチャル病院見学を取り入れたことで、3病院の見学ができ、薬剤部での調剤過程、中央検査部での標本作成、早朝カンファレンス、若手医師の話を聞くなど、今までの実習では見ることができなかった業務、大人数では入ることができなかった場所の見学などすることができた。</li> <li>・普段では業務の一部しか見学できないことも、要点だけをビデオに収めることで一連の業務が見学できたという学修内容の増加、学修機会の公平性の確保ができた。</li> </ul>
村越 (2020)	看護早期体験学習において学生が捉えた看護技術の意味―看護技術を学習していない時期の実習から―	実習後の学生を対象に自作無記名自記式質問票を用いてデータを集し、記述統計とコード化したものをカテゴリー化し、質的記述的研究を実施した。	看護学部 1年生 前期	病院	5日間	<ul style="list-style-type: none"> <li>＜見学実習＞</li> <li>実習5日間のうち、4日間病棟で見学実習。1日6時間、実習中合計24時間程度看護師に同行し見学を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者・家族へ与える技術の影響や効果、技術の安全の確保・質・内容に着目してた。</li> <li>・患者の立場で、患者の表情や行動から生活者として技術に抱いているであろう感情や反応をとらえていた。</li> <li>・学習者として、ありのままの患者・家族を生活者や援助者ではなく第三者の視点で着目していた。</li> <li>・看護技術の意味や価値をさまざまな視点から意味づけられていたことがわかった。</li> </ul>
斎藤 島田 神戸 宮原 (2019)	管理栄養士養成施設における導入教育の実践：早期体験合同実習を通して	学内演習や学内報告会、学外体験実習の内容を考察し、実践報告をした。	管理栄養士 学生 1年次前期	学内 医療 社会福祉 児童福祉 地域保健 学校教育 食品企業	学内実習 6日間 学外実習 2日間	<ul style="list-style-type: none"> <li>＜学外体験実習＞</li> <li>医療・社会福祉・児童福祉・地域保健・学校教育・食品企業よりいずれかの施設を選択し、臨地での専門職の講義を受け、体験実習を実施。また食品関連企業へ全員で行き、広報担当者からの説明を受けた。</li> <li>＜学外実習後学内演習＞</li> <li>体験学習の学びについてディスカッションした。</li> <li>＜合同発表会＞</li> <li>看護学科と合同で実施した。学内報告会では、実習で学習した内容を1グループ8分にとまとめ発表し共有した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護学科との合同発表会では、学習成果を報告し合い、相互に学ぶことができていた。</li> <li>・食品関連企業体験実習では、企業における管理栄養士の役割を理解できた。</li> <li>・体験実習では、周りを見ながら行動する姿勢や学びを得る姿勢があった。</li> <li>・実習施設の栄養管理、献立管理を理解し、管理栄養士の役割や多職種連携の重要性を習得できた。</li> <li>・将来像を描き今後の学びに対するモチベーションを高める機会となった。</li> </ul>

表. 早期体験実習の方法とその効果分析対象文献続き

研究者 (発行年)	論文題目	研究方法	指導する 職種 実習時期	実習方法			学習効果
				実習場所	実習期間	実施内容	
中根 廣田 宇佐美 藤井 (2020)	作業療法教育 における早期 体験学習の導 入とその考察	実習後の学生 へ満足度調査 をアンケート 調査票にて実 施し、早期体 験実習の教育 効果について 考察した。	作業療法学 専攻 1年次 11名	学内 高齢者総 合福祉施 設 障害者総 合福祉施 設	論文中に 記載なし	<p>&lt;介護分野&gt; 4月に面接や介護方法の基礎、体験中の礼 節や身だしなみなどを講義。5月に関連施設 (高齢者総合福祉施設・障害者総合福祉施設) で2日間の体験実習を行い、その後レポート 課題提出及び報告・検討会を実施した。レ ポートへのフィードバックとして、教員と各 施設責任者による形成評価を行った。</p> <p>&lt;リハ分野&gt; 7月に福祉機器展、8月に体験型補助大講 習会にボランティア活動に参加した。9月に 病院作業療法現場体験を実施10月にリハビ リを受けている患者の講話を聴講し実際の障 害部位の触診を実施した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>過去3年間の1年次退学者数は割合は16.7%であった早期体験実習に取り組んだ平成28年度の退学者数割合は0%で、退学者数の割合を下げる事ができた。</li> <li>医療従事者や患者等と接して対人交流の重要性や積極的な行動の大切さについて学ぶことができていた。</li> <li>学生自ら自律しようとする姿勢が多くみられた。</li> </ul>
山西 中岡 和泉 松澤 高橋 三條 武内 (2020)	看護基礎教育 における早期 体験実習の学 びの検討 ：学生のとら えた看護の対 象者とその生 活に焦点をあ てて	早期体験実習 を履修した学 生がポスター にまとめた学 びの内容を質的 機能的に分析し、学生の 捉えた看護の 対象者及びそ の生活につい ての実習によ る学習効果を 明らかにした。	看護学部 1年生66名 4月～7月	学内 病院 施設	学内実習 6回 臨地実習 1日	<p>&lt;学内演習6回&gt; ・医療機関や施設で過ごす看護の対象者を知り、生活の場や自宅での生活環境と医療機関や施設の環境の違い、看護の対象者とのコミュニケーションについて考えるといった内容で個人ワークを行った後、グループワーク、発表をした。</p> <p>&lt;病院・施設見学実習&gt; 県内の医療施設11か所に分かれて実施した。学生は病院・施設担当者とともに過ごし、患者の1日の生活や看護の実際を見学した。見学実習の対象者は主に成人・高齢者であった。</p> <p>&lt;見学実習後学内演習&gt; 個人作業後5～6人でグループを形成し、看護の対象者とその生活について学びをまとめ、ポスター発表を行った。教員は話し合い効果的に進行するように声かけをし、ポスターセッションでは発表内容が広がるように関わった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>見学した状況から派生させて乳幼児・妊産婦・褥婦まで、看護の対象と拡大して捉えていた。</li> <li>実際の現場に立ち、その場の音やにおいを感じとった体験から、対象者の生活においても多角的に捉えることができていた。</li> <li>見学実習後ポスター発表では、体験を各自の意見として表出し、言語化していく過程において客観的に整理することができた。</li> </ul>
西木 久永 桂 藤宮 白澤 (2019)	新入生に対する 医学入門の 最近3年間の 現状と課題	受講後の学生 に学生授業評 価表を用いて アンケート調 査を行い、授 業満足度・授 業外学習時間 の推移を確認 した。	医学科1年 生 4月～7月	学内 高齢者施 設 医学部附 属病院	論文中に 記載なし	<p>*医学への準備教育とプロフェッショナル教育の一部として以下の内容を実施した。</p> <p>&lt;高齢者施設体験実習&gt; &lt;医学部附属病院見学&gt; &lt;ドクターヘリ見学&gt; &lt;解剖実習見学&gt; &lt;少人数グループ討論&gt; &lt;フレッシュマンセミナー班別討論・グループ発表&gt; &lt;外部講師特別講演会&gt;</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>満足度た高い水準を維持し、授業時間外学習時間の拡大がみられた。</li> </ul>
渡部 伊藤 八木 成田 中林 青木 山本 生田 林 山本 高井 佐藤 諸根 亀岡 大野 米沢 (2018)	発表内容から 疑問点を抽出 する能力と質 問を行う能力 の客観的評価 と解析 →2018年度の 本学医学部1 年生と薬学部 1年生に対する 調査→	早期体験学習 発表会で、学生 へ配布したリ フレクション シートに書き 出された疑問 点の数と発表 会で質問行動 をした学生を 統計解析した。	医学部 1年生 97名 薬学部 1年生 277名	学内	1日間	<p>*すべて医学部と薬学部合同で実施した。</p> <p>&lt;乗客講演会&gt; &lt;ハンディキャップ体験&gt; &lt;SGD (Short Group Discussion)&gt; 10名程のグループ別とし課題を提示して討議した。</p> <p>&lt;発表会&gt; SGDの討議の結果を発表する。リフレクションシートを配布し、他グループの発表では疑問点を1つ以上書き出すことを義務づけた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全員が発表内容に対し疑問点を抽出することができ、リフレクションシートの活用は傾聴する態度を培う教育に有効であることがわかった。</li> </ul>
田中 幸田 田村 松村 島本 (2018)	学習知識の獲得 および定着を 確認するための ツールとしての プレテスト、ポスト テストとファイ ナルテスト	実習後の学生 に行ったプレ テスト・ポ ストテスト・ ファイナルテ ストの回答率 から、統計解 析を実施した。	薬学部 1年次生 310名 後期	学内	4日間	<p>*早期体験実習前（プレテスト）、直後（ポストテスト）、1週間後（ファイナルテスト）に同一問題のテストを実施した。</p> <p>&lt;早期体験実習&gt; フィジカルアセスメント・神経視診・バイタルサイン・Self monitoring of blood glucose・採血と注射・持参薬選別と評価・スパイロメーター・Therapeutic drug monitoring・心肺蘇生・眼と耳の構造と診察手技・尿検査・パルスオキシメーター</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポストテストの正答率はプレテストの正答率よりも有意に上昇し、ファイナルテストでも高い正答率を維持した。実習終了1週間と短期間ではあるが知識の定着は出来ていたと考えられた。</li> <li>講義に比べ実習の方が知識定着効果が良好であった。</li> </ul>
西出 長岡 島田 (2019)	助産学専攻科 における早期 体験実習の評 価 助産所実習に おける学生の 学びの分析	助産所実習を受 講した学生の 実習記録を分 析し、早期体 験実習の教育 効果を分析した。	助産師 専攻科 入学 3週間後	県内外5 か所の助 産所	3日間	<p>&lt;実習前オリエンテーション&gt; 各施設の特徴や展開している事業、対象の特性について説明した。</p> <p>&lt;実習施設&gt; 妊婦・褥婦・新生児健診以外にも、新生児訪問・ベビーマッサージ教室・温熱療法など産前産後の各施設で行われている事業を見学。また助産師の指導のもと、助産ケアに参加、分娩があれば立ち合い、助産所の掃除や洗濯、食事準備など行った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>専門的な知識・技術の必要性を感じ、専門的なアドバイスの効果を確認できていた。</li> <li>対象者への配慮や寄り添うこと、共に考える姿勢についてを学んでいた。</li> <li>目標とする助産師像が描け、それに向けての自己課題も明確にすることができていた。</li> </ul>
伊藤 辻村 真柄 渡邊 白石 那小屋 竹石 井上 (2019)	車椅子実習に 対する歯学部 1年次生の意 識に関する検 討	学生に、実習 の効果に対する アンケート調 査を実施。 評定尺度法で の解析に加え 計量テキスト 分析を実施。 車いす実習の 効果を検討した。	歯学部 1年次生 40名 口腔生命福祉学 科 1年次生 19名 4月～7月	学内	論文中に 記載なし	<p>*早期臨床実習の一環として車いす実習を実施した。</p> <p>&lt;車いす実習&gt; 9～10名の学生で、車いすの走行介助、ベッドから車いすへの移動介助、車いすから椅子への移乗を実施した。それぞれ、要介護社と介護者を交代し、全員が要介護者と介護者を経験できるようにした(90分間で実施)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「大変そう」という漠然としたイメージが具体的に变化していた。</li> <li>車いすの介助時や移乗介助時に注意することについて、介助される側の立場に立って考えることができていた。</li> <li>介護技術の習得が難しいこと、相手の立場にて考えることが大切であることを体験できていた。</li> </ul>

# 医療系専門職を目指す学生に対する早期体験実習の方法と学習効果に関する文献レビュー

表. 早期体験実習の方法とその効果分析対象文献続き

研究者 (発行年)	論文題目	研究方法	指導する 職種 実習時期	実習方法		学習効果
				実習場所	実習期間	
木内 (2019)	医療総合大学における体系的、段階的なチーム医療教育	早期体験実習の実践報告をした。	医学部 歯学部 薬学部 保健医療学部 1年次	学内 病院 福祉施設	2週間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他学部の学生の実習や業務を見学することで、相互の職能に関する理解を深められている。</li> <li>・チーム医療の実際を見聞し、その重要性を学ぶとともに、学習に対するモチベーション付けができていた。</li> </ul>
山口 上野 緒方 辻野 矢野 (2019)	基礎看護学実習Ⅰの学習効果の検討 ー学びのレポートおよび学生自己評価結果からー	実習目標に準じたアンケート結果をリッカード尺度を用いて無記名自記式質問紙法を用いて単純集計し、学習効果を評価した。	看護学部 1年次 7月	学内 病院	5日間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護職としてさまざまな背景の対象者と関わるために必要なコミュニケーションについて多くを学び、学修効果を得ていた。</li> <li>・コミュニケーションの大切さ、難しさ、対象に合わせた関わり方を体験することで学んでいた。</li> <li>・コミュニケーション技術の活用不足・困難さなど、今まで気づいていなかった自分の傾向に気づいていた。</li> <li>・看護職を目指す自分の適応性について考えられていた。</li> </ul>
滝沢 加納 吉良 富田 斎藤 對開 武島 馬場 海山 (2018)	多職種連携教育(IPE)による早期体験実習後の理学療法学科の学生の気づきによる学び	実習後の理学療法学科学生37名へ実習前後にアンケート調査を行い、そこに自由記載されたキーワードを分析。チーム医療に関する学びを考察した。	看護学科 理学療法 作業療法 放射線技術 1年次生	学内 病院	論文中に記載なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人の態度・個人の能力・他者の理解や関係性・チームとしての態度を学んでいた。</li> <li>・個人の態度は、実際の活動で学生が不快と感じた事象からチームワークを阻害する要因を学習できていた。</li> <li>・病院見学で感じたスタッフの良好な関係性や、自身のグループがチームとして関係性を気付いていく中で、自分の専門以外に対する理解の重要性を学び、連絡や情報の管理または処理、チームメンバーとの協調などから、チームとしての態度を学んでいた。</li> <li>・多様な領域の業務を見学したことで、他者の理解や関係性とチームとしての態度を学んでいた。</li> </ul>
二宮 若村 黒木 足立 (2018)	高度医療専門職養成を目指した人間健康科学科における早期体験実習の取り組み	早期体験実習を受講し、提出された個人レポートおよびグループレポートから学生の学びを抽出した。	先端看護科学 15名 先端リハビリテーション科学 理学療法 学講座5名 先端リハビリテーション科学 作業療法 学講座5名 一括入試 入学者73名 1学年 7月31日 ～8月11日	学内 病院	10日間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外来受診体験実習では、患者の気持ちを知り、医師患者感到信頼関係があることを感じたり、看護師の関わりに患者の表情が穏やかになっていたことに気づき、接し方を学んでいた。また、リフレクションをすることで患者の生き様、生活を見ていた。</li> <li>・車いす体験では、普段慣れている道や建物が車いす生活者にとって、不便であることの気づきに焦点が当てられていた。周囲の1人の眼差しも含めて援助することの気づきにつながっていた。</li> <li>・病院部門見学では、チーム医療の存在に気づき、多職種が関わっていることを学んでいた。</li> <li>・病院環境の探索実習では、病院環境に関心を持つことができていた。</li> <li>・病院環境の定点観測実習では病院の様相が時刻によって変化していくことを実感できていた。</li> <li>・ワークショップでは、多様な患者理解、様々な医療専門職の役割理解ができていた。</li> <li>・発表会では、相手に理解してもらうことの大切さと聞き手に伝えることの難しさを学ぶことができていた。</li> </ul>
小林 渡部 藤代 (2016)	看護学生と指導教員が捉えた早期体験実習(フィールド体験実習)の現状と課題(報告)	学生が実習終了後に提出した最終レポートと、実習終了後実施したアンケートよりデータを収集し、分析した。	看護学部 1年次生 88名 8月上旬	学内 病院 障害者施設 訪問看護ステーション 市町村保健センター 保育所 老健施設 老人ホーム	3日間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「対象者理解」や「施設的环境や安全な環境」「コミュニケーション技術」「コミュニケーションの意義」「看護師の仕事の理解」「看護師に必要な能力」「観察の重要性」などは何の施設でも学ぶことができていた。</li> <li>・「地域の特徴の理解」や「時代背景の理解」については、保険センター以外では学びが得られにくいことがわかった。</li> <li>・臨地で看護の対象者との関わりを通して対象者への関心の向け方を学んでいた。</li> </ul>
堀内 神戸 (2016)	薬学教育6年生における早期体験学習特別支援学校見学実習における気づき	学生が提出した見学実習レポートから、気づきを示す原文を抽出し、実習効果を検討した。	薬学部 1年生	特別支援学校見学実習	1日間(2時間弱)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際の見学実習を通して、思い込みや偏見が打ち砕かれ、人の痛みが自分の痛みに変えられていることがわかった。</li> <li>・実習後のレポートでは内省のチャンスを与えていることがわかった。</li> </ul>

## VI. 考察

### 1. 早期体験実習で使用する施設

実習施設は、病院に限らず様々な施設が使用されていた。早期体験実習では、医療の対象者となる人々への幅広い理解、医療の実践の場に対する理解ができることが望ましいと考える。そのためには、病院以外の施設へも視野を広げて検討する必要があると考える。特に保健所実習では、「地域の特色の理解」「時代背景の理解」といった学習効果が得られている（小林他, 2016）ことから、地域医療の知識を学習することを大切にしている場合や地域貢献の役割を担う大学では、積極的に取り入れていくことが望ましいと考える。

### 2. 各職種で共通していた実習内容

各職種の実習で共通していた内容は、実習前に学内での講義や事前学習、グループワークを実施していることであった。入学間もない学生が実習の目的を理解し、主体的に学び取るには、教員による援助が不可欠と言われている（伊藤・中岡・岡崎他, 2009）。早期体験実習での効果を最大限に引き上げるためには、実習前の学内での講義や事前学習、グループワークを通して、学生のレディネスを整えておくことが大変重要であると考ええる。

### 3. 臨地で実習を実施することのメリット

遠隔でのバーチャル病院見学の試みについて報告をまとめた石橋他（2021）は、その効果を明らかにしつつ、現場の臨場感を肌で感じる部分が少ないことが劣る面だと示唆している。現場の雰囲気を感じ、臨場感を持った体験を行うことや、学生の期待度に答えるためには、やはり実際に病院や施設に出向く必要があることがわかる。看護職を目指す学生にとっては、実習場面においてロールモデルを見つけることが看護師としての専門職的態度を習得するために有効であるとされている（杉森・舟島, 2021）。臨地で実習をすることで学生が模倣したいと思えるロールモデルに出会う可能性が高まると考える。ロールモデルや対象者と

の出会いが、学生の今後の学習への意欲やモチベーション維持につながっていると考える。そして何より、知識や技術が身についていない早期体験実習だからこそ対象者との関わりを通して患者の立場で感じるとともに、“生活者”としての視点で、入院患者である対象者を理解することができる（谷口, 2010）。また実際の現場に立ち五感を活用しながら学べる体験は患者の生活を多角的に理解することだけに留まらず、コミュニケーションの重要性への気づきも大きい。

一方で、病院の各部署の見学やディスカッションについては、バーチャルで実施できるツール活用や、遠隔での受講が有効であることが明らかになっている（二瓶他, 2021; 石橋他, 2021）。今後、感染拡大により施設訪問が厳しい状況になった際には、その時間数を最小限にしたとしても、ポイントを絞って対象者との関わりが持てるような環境を準備しつつ、デジタルツールを適所に活用し、有効な実習内容となるよう工夫していく必要があると考える。

### 4. 多職種合同での実習

他学部混合で実習を行っている学校では、他者の理解や関係性とチームとしての態度を学ぶことができていた（滝沢他, 2018）。多職種連携教育とは、「複数の領域の専門職者が連携およびケアの質を改善するために、同じ場所でともに学び、お互いから学びあいながら、お互いのことを学ぶこと」と定義されている（大塚, 2009）。早期体験実習において、このような形態を取り入れることは個人の態度に関する学びが深く、円滑なチーム医療の土台になるものとして重要であると考ええる。

看護における多職種の連携についても、広い視野で看護と対象者を捉えられるよう入学後早期からの取り組みが有効であるとされている（藤代・小林・渡部他, 2016）。看護系大学の中には、看護以外の医療系の学部を有していない場合も多く、どの大学でも共通して実施することは困難な例であると考ええる。しかし近年、様々な職種の専門性を認識し、かつ看護の専門性を高め、それぞ

れが高い専門性を発揮して患者中心に連携していくことができる人材が求められている。入学後の早期に他職種への理解を深めることが、その後の各職種の専門性を高めるきっかけになり得るといえる。看護学部だけの大学では、実習病院と密に連携をとり、他職種の活動を深く学習できるようなプログラムの検討が必要であると考え。さらに、早期から他職種との関わりをもつことで、自分の態度がきっかけとなりチームワークを阻害する可能性について気づきを得られることがある。早期から多職種間でのカンファレンスなどを体験することにより、個人の態度について気づくことができる機会をもつことは、医療専門職を目指す個人としての成長にもつながっていくと考える。

## 5. 教員の関わり

施設体験実習では、教員がタイミングを逃さずに関わり、リフレクションを行うことで、経験を気づきに変え、学習につなげるという過程が必要である（二宮他, 2017; 村越, 2020）。臨地実習では、学生が目的を持った相互主体的な関わりのプロセスを経験し、その体験を意味づけしていくことが重要であり、そのためには教員が学生の経験のプロセスに理論的な意味を与えていくことが必要である（安酸, 2017）。学生の体験を最大限に引き出し学びにつなげられるような関わりを教員が統一してできるよう調整していく必要性が考えられた。また、実習後のグループワークや発表を通して学んだことをアウトプットしていくことが、知識の定着となり、その後の学生生活への橋渡しとなっていくと考える。

## 6. 実習後の授業内容とのつながり

早期体験実習は単独として扱われることなく、学びをその後の学生生活および段階的な学習へとつなげていくことを可能とするために、他の科目と連携をしていくことが重要であると考え。知識定着の効果がみられていたプレテスト・ポストテスト、ファイナルテストは（田中他, 2018）、他の科目での活用がしやすいと考える。また、実

習後に展開される看護基礎科目の授業内においても、学生が実習で得た意欲やモチベーション、ロールモデルを言語化し、体験を振り返りながら受講できるよう、授業内容を工夫することも必要であると考え。さらに、早期体験実習の後に位置付けられている臨地実習においても、早期体験実習で学んだ内容に積み上げをしていくことができるような教員の関わりが重要であると考え。

## 7. コロナ禍での取り組み

コロナ禍となり、現場へ出向くことができない場合に、動画を準備したバーチャル病院見学や、施設の方に来てもらい講義を行うなど、学内で代替する方法をとっても、学習効果を得ることができ、学修機会の公平性の担保などメリットもあることがわかった（石橋他, 2021; 二瓶他, 2021）。その際には、内容を教員側でよく検討し、充実させることが重要であると考え。学内実習を余儀なくされた状況となった場合には、実習施設と細やかな連携を取り、内容と方法を検討していくことが必要であると考え。

また、そのような状況では、学内での取り組みも制約を受けることが考えられるが、デジタル機能を使用したグループワークやディスカッションを行うことも効果が高いことがわかった（石橋他, 2021; 二瓶他, 2021）。デジタル機能のメリットデメリットをよく周知し、デメリットの部分を教員側で補えるような関わりが必要と考える。

## VII. 研究の限界

本研究では、検索用語を限定し、国内論文のみの検討としたため 研究対象とすべき論文が包括的に収集できていない。今後さらに幅広い知見を得るには、海外の発表論文についても視野を広げることが課題である。また、2020年以降、医療系専門職教育における臨地実習は、COVID-19感染拡大の影響を大きく受け過渡期にあることから、今後数年は臨地実習の在り方が変容していくことが予測される。社会情勢の変化に応じて再検討を重ねていく必要があると考える。

## VIII. 結論

本研究では、医療系専門職を目指す学生を対象とした早期体験実習に関する論文の検討により、早期体験実習の方法および学習効果について以下のような示唆を得た。

1. 早期体験実習では、病院だけでなく幅広い施設を活用することで、看護の対象を捉える視点を広げることができ、あらゆる医療実践の場についての理解が深まる。
2. 生活者としての対象理解を深めるためには、コロナ禍にあっても、可能な限り臨床に出向き、短い時間であっても現場を体感することが重要である。
3. 早期体験実習には、多職種連携の視点で個人の態度を養う学習効果がある。多職種連携の視点を養うためには、早期から多職種との関わりをもち、チームワークを阻害する因子について気づくことができるような実習方法や各職種の専門性を理解できる実習内容を整備していくことが重要である。
4. 感染状況により制約が強いられる状況となった際には、学生ができるだけ現場を体感できるよう実習施設と細やかな連携を取り、内容を検討し、デジタル機能も積極的に取り入れていく必要がある。

## 【文 献】

藤代知美, 小林淳子, 渡部光江 (2016). 看護学教育における早期体験実習での学習内容に関するレビュー. 四国大学紀要 (A) 46, 183-189.

早川真奈美, 古田雅俊, 中村恵子 (2016). 早期体験実習の意義に関する文献検討. 中京学院大学看護学部紀要, 6 (1), 49-62.

堀内正子, 神戸敏江 (2016). 薬学教育6年生における早期体験学習: 特別支援学校見学実習における“気づき”. 昭和薬科大学紀要, 50, 21-31.

石橋敬一郎, 柴崎智美, 杉山智江, 米岡裕美, 荒木隆一郎, 植村真喜子, 大西京子, 山田泰子, 川村勇樹, 中平健佑, 金田光平, 芝崎由佳, 小山政史, 高橋健夫, 友利浩司, 東守洋, 椎橋実智男, 森茂久 (2021).

医学部1, 2年生に対するバーチャル病院見学・医師業務見学実習の試み. 医学教育, 52 (3), 221-236.

伊藤朗子, 中岡亜希子, 岡崎寿美子, 岩永真由美 (2009). 早期体験実習の評価と学生の学びに関する基礎的検討. 千里金蘭大学紀要, 63-72.

伊藤加代子, 辻村恭憲, 真柄仁, 渡邊賢礼, 白石成, 那小屋公太, 竹石龍右, 井上誠 (2019). 車椅子実習に対する歯学部1年次生の意識に関する検討. 新潟大学高等教育研究, 7, 1-8.

岩脇陽子, 滝下幸栄, 今西美津恵, 松岡知子, 山本容子, 西田直子, 宇野真由美, 鈴木ひとみ (2008). 早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果と実習満足度に関連する要因. 京都府立医科大学看護学部紀要, 17, 31-39.

木内裕二 (2019) 医療総合大学における体系的, 段階的なチーム医療教育. 薬学教育, 3, 1-9.

小林淳子, 渡部光恵, 藤代知美 (2016). 看護学生と指導教員が捉えた早期体験実習 (フィールド体験実習) の現状と課題 (報告). 四国大学紀要, (B) 43, 1-7.

小向敦子, 高橋有里, 三浦奈都子, 鈴木美代子, 遠藤良仁, 高橋亮, 三井美波, 及川陽子, 角掛奈々, 藤澤望 (2022). 基礎看護学実習 I における模擬電子カルテを用いた代替学内実習の取り組み. 岩手県立大学看護学部紀要, 24, 83-98.

宮武一江, 井上弘子, 小林匡美, 磯本暁子 (2020). 成人看護学実習 B (急性期・統合実習) での学内における臨地実習代替演習内容の報告—新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行下での取り組み—. 新見公立大学紀要, 41, 165-172.

文部科学省看護教育のあり方に関する検討会2002 (2021-11-1). 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて,  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm)

村井美俘, 石川徳子, 久保木由美 (2021). 母性看護学実習の取り組み～臨地から学内へ～. 神奈川歯科大学短期大学部紀要, 8, 29-32.

村越望 (2020). 看護早期体験学習において学生が捉えた看護技術の意味—看護技術を学習していない時期の実習から—. 秀明大学看護学部紀要, 2 (1), 1-12.

- 中根英喜, 廣渡洋史, 廣田薫, 宇佐美知子, 藤井雅也 (2020). 作業療法教育における早期体験学習の導入とその考察. 岐阜保健大学紀要, 1, 163-165.
- 二瓶裕之, 浜上尚也, 木村治, 小田雅子 (2021). 面接受講と遠隔受講を組み合わせた早期体験学習ワークショップの実施と検証. 薬学教育, 5, 1-9.
- 二宮早苗, 若村智子, 黒木裕士, 足立壮一 (2017) 高度医療専門職養成を目指した人間健康科学科における早期体験実習の取り組み. 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要: 健康科学, 13, 10-16.
- 西出弘美, 長岡由紀子, 島田智 (2019). 助産学専攻科における早期体験実習の評価. 茨城県立医療大学紀要, 24, 81-89.
- 西本新, 久永拓郎, 桂春作, 藤宮龍也, 白澤文吾 (2019). 新入生に対する医学入門の最近3年間の現状と今後の課題. 山口医学, 68 (4), 145-149
- 西村英尚, 森博美, 安田公夫, 梅村雅之, 谷澤克己, 仲山千佳, 重山昌人 (2022). 新型コロナウイルス禍での早期体験学習に関するアンケート調査結果の検討. 岐阜医療科学大学紀要, 16, 25-34.
- 大塚真理子 (2009). IPW/IPW の理念とその姿, IPW を学ぶー利用者中心の保健医療福祉連携. 埼玉県立大学編, 12-24, 中央法規.
- 斎藤陽子, 橘陽子, 島田美樹子, 神戸美恵子, 宮原公子 (2019). 管理栄養士養成施設における導入教育の実践ー早期体験合同実習を通してー. 桐生大学紀要, 30, 77-81.
- 菅原啓太, 岡根利律, 西川真野, 川島珠実, 上田貴子, 灘波浩子, 中西貴美子 (2021). コロナ禍における基礎看護学実習Ⅱ学内実習プログラム構築の取り組み. 三重県立看護大学紀要, 特別号, 25-30.
- 杉森みどり, 舟島なをみ (2021). 看護教育学第7版, 258-270, 医学書院.
- 滝沢恵美, 加納尚美, 吉良淳子, 富田美加, 斎藤さわ子, 對間博之, 武島玲子, 馬場健, 海山宏之 (2018). 多職種連携教育 (IPE) による早期体験実習後の理学療法学科の学生の気づきにみる学び. 茨城県立医療大学紀要, 23, 71-76.
- 田中さおり, 伊織光恵, 日沼千尋 (2020). 学内実習プログラムで実施した小児看護学実習における学生の学び. 天使大学紀要, 21 (2), 15-31.
- 田中沙織, 幸田祐佳, 松村人志, 島田智織 (2018). 学習知識の獲得および定着を確認するためのツールとしてのプレテスト, ポストテストとファイナルテスト. 大阪薬科大学紀要, 12, 11-16.
- 谷口清弥 (2010). 看護学生の早期体験実習後の構成的カウンターグループを用いたリフレクション. 看護教育研究学会誌, 2 (2), 43-50.
- 安酸史子 (2017) 経験型実習教育 - 看護師をはぐくむ理論と実践. 8-9. 医学書院
- 山口佳子, 吉田理恵, 山本美紀, 種本純一, 山川京子 (2019). 基礎看護学実習Ⅰの学習効果の検討ー学びのレポートおよび学生自己評価結果からー. 日本赤十字北海道看護大学紀要, 19, 11-16.
- 山口智子, 上野範子, 緒方巧, 辻野朋美, 矢野正子 (2007). 初回看護学実習のレポートの分析 (その1): 早期体験学習の学習効果に焦点をあてて. 藍野学院紀要, 21, 83-92.
- 山根尚弥, 毛利泰士, 中島好明, 安藤早礎, 藤代千晶, 村上旬平, 秋山茂久 (2019). 早期体験実習としての障害者支援施設見学での歯学部学生の学び. 障歯誌, 40, 72-79.
- 山西亜紀子, 矢野智恵, 中岡亜紀, 吉田亜紀子, 和泉明子, 今村優子, 政平憲子, 東麻奈美, 松澤志保, 高橋朋子, 三條憲是, 山崎晶子, 武内美恵 (2020). 看護基礎教育における早期体験実習の学びの検討ー学生の捉えた看護の対象者とその生活に焦点をあててー. 高知学園短期大学紀要, 50, 57-67.
- 渡部俊彦, 伊藤邦朗, 八木朋美, 成田紘一, 中林悠, 青木空真, 山本由美, 生田和文, 林もゆる, 山本由似, 高井淳, 佐藤厚子, 諸根美恵子, 亀岡純一, 大野勲, 米沢彰彦 (2018). 発表内容から疑問点を抽出する能力と質問を行う能力の客観的評価と解析ー2018年度の本学医学部1年生と薬学部1年生に対する調査ー. 東北医科薬科大学研究誌, 65, 49-54.